国

語

（解答番号 1 ～ 35）

1／L

2024年度 試験問題

国　　語

試験時間60分

〔注　　意〕

1．この問題冊子は指示があるまで開いてはいけない。
2．受験番号が正しく記入・マークされていない場合は０点となる。
3．解答はすべて解答用紙の所定欄にマークすること。例えば，問題文中に 10 と表示のある問いに対して③と解答する場合は，次の(例)のように**解答番号10の解答記入欄の③にマーク**すること。正しくマークされていない場合は採点できないことがある。

（例）

解答番号	解答記入欄（マーク）
10	① ② ● ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

4．問題冊子の各ページの余白は自由に使用してよいが，どのページも切り離してはいけない。
5．試験終了後，解答用紙は通路側に置くこと。なお，問題冊子は持ち帰ること。

〈マーク式についての注意〉

1．機械が読み取って採点するので，折り曲げたり汚したりしないこと。
2．マークはＨＢの鉛筆で枠の中を濃く塗りつぶすこと。
3．１つのマーク欄には１つしかマークしないこと。
4．訂正はプラスチック消しゴムでよく消し，消しくずはきれいに取り除くこと。
5．所定欄以外には何も書かないこと。

問題一　次の文章を読んで、後の各問に答えなさい。

生活の中の「公的」部分としての社会的行動の大方が、予め外側から与えられた決まりや掟に従って止むを得ず行なわれる「公式の務め」という性格を帯びて来ると、人々の自然な関心は現に在る社会関係とは別の処に向き始める。

その際の「別の処」に向かう関心は、昔なら神様や彼岸などに帰依する方向を探るのが一般的であった。そしてそういう、此の世の社会関係からの宗教的超越が多くの人々に〔1フキュウ〕すると、結果として、帰依者の間に、別の社会（もう一つの此の世）が産み出されるのであった。しかし今日の場合には、そうした超越の方向は一般的ではなくて、むしろ逆に「自我」の方へ自発的関心を収斂するのが支配的な方向となっている。世界のメカニズムが分って了って（或は分った積もりになって了って）、神秘的な原因などは想像も出来ない状況になって来ると、「世俗化」が貫徹して宗教的超越は中々起こりにくい。おまけに、生活資材の全てを大量生産・大量流通の大体系に負って了っている今日では、「鯨の腹中に」すっぽりと呑み込まれていることを全ての人が知っているのだから、例外的少数者を除けば、「別の処」に向き始める自然な関心の的は、殆ど自働的に自我へ「私」へと絞られていく。こうして現代の今日的局面は精神的には「[a]大衆的規模における自我の時代」となっている。

しかし、自我への収斂と言っても今日のそれは、自我を問題として思考の前に据え、疑いの対象として取り扱おうとするものではない。そういう[b]デカルト的な知的懐疑でもなければ、芸術的想像の領域でデカルト的懐疑に等価であった『リア王』の問いでもない。「私が何者であるか誰か教えてくれ」というリア王の問いは、それに答えた「リアの影さ」という道化の返事によって、その問いが持つ自己否定性を明らかにする。存在する何者かではなくて藻抜けの殻に過ぎないのではないか、という痛烈な疑いが自分に対して向けられている。今日の社会に一般的な自我への関心の集中は、そうした現存の自己に対する否定性を持たないのが普通である。デカルトや『リア王』と異なるだけではなく、戦前の[c]日本の「私小説」が示した「私」に対する態度とも違っている。誰もが想い出すことが出来るように、戦前の「私小説」でも「私」は問題の塊として扱われた

し、その文章の無駄を取り去った簡潔さは、「私」に対処する態度の厳格さを表してもいた。

そうして現存する自我を疑問の対象とするということは、『方法叙説』がいち早く言っているように、「学校」や支配的社会から「私が受け入れた」ことによって己れの裡に入り込んで来ている一切の虚偽や偏見を疑いと思考によって「抜き取ろう」とする営みを意味していた。その結果、いやむしろその営みそのものにおいて既に、その自我は一つ一つの物事をそれとして即物的に識別するものとなっている。こうして自我を疑いの［　イ　］上に置いて止まない自我は、精神のドラマの核心であって、そこから発生する「物に即した」識別行為は、虚偽をたっぷりと含んだ現存世界から虚偽を一つ一つ抜き取り、物事の自然の真なる姿を一つ一つ描き出して、やがて「自然学」と「新しい世界」を発見していくことになる。その、世界像の劇的転換は紛れもなく「もう一つの此の世」の創作であった。同時にそれは「もう一つの超越」でさえあった。その過程は一歩一歩確かめながらゆっくりと進むものであったけれども、進みにおいて緩やかであるだけに、一挙暴発的な速断とは違って、一そう根本的な世界像の転換をもたらすものであった。

[d]今日の「文明社会」に一般的な自我への収斂は、そのような、世界の再構成へと向かう精神のドラマを内蔵しているものではない。此処に在るのは、疑いの対象としての自我ではなくて、それ自体が目的とされている自我なのであり、「虚偽を含んだ自我を否定していく自我」ではなくて、現に在る自我を大事にそのまま肯定し、出来る事なら何処までもそれを延長していこうとする自我なのである。虚偽に満ちた自我をゼロにまで還元することによって、「自然理性」の自我を確立していく対話的自我ではなくて、ひたすら既存の自我を真偽ごたまぜの塊のまま丸ごと大切に保存し出来ればそのままの形でいくらか拡張しようと願っている自我なのである。すなわち、所与の欲求の充足を事とする心理学的自我であり、そこに働いている「理性」はと言えば、主として、充足における損得を勘定する計算なのである。バランス・シートが今日の「理性」なのであろうか。

生産者としての側面（すなわち物事の自然と直接向かい合う側面）を尨大な機構的体系の中に吸収されて了って、その体系の中で微塵と砕けて雲散霧消し終わった存在が、残された消費の側面だけで自己の働きを安全に発揮しようとする時、そこに

発生する自我志向は、今述べたような、欲求の満足を目指す自己内運動とならざるをえないであろう。そうなる社会的根拠は十分に存在している。そして何人と雖もその根拠から完全に自由ではありえない。しかし、根拠のあることだからといって、(e)その自我志向が構造的性質としてナルシズムの病気を抱えているものであることは見失ってはならないであろう。

自我の満足だけをひたすら追求する態度を、或る種の精神医学はナルシスの故事とは別に、一般化して「ナルシズム」と呼んでいるようだが、しかしその故事とその態度の間には矢張り構造的類似があるに違いない。池の面に映る自分の映像に恋慕して止まない姿の底には、事の性質上いつまで経ってもその映像を腕に抱くことが出来ないところから来る、欲求不満と不安の潜在的昂進がひそんでいる。丁度そのように、現に在るがままの「自我」を丸ごと肯定して、それの欲求の満足をひたすら追求するところには、自足よりも不満と不安が絶えずつきまとう。

具体的な物と対面する関係の中で生きている自我は、物それ自体の限界を己れの欲求の限界として自然に自得する。全ての知覚形式を通して総合的に物の限界を自ら知るのだから、その自制は、道学的命令による外からの制限などとは違って、極めて自然な内側からの自足となる。しかし、大量生産と大量流通と大量消費の機構の中に沈没して、物との関係を失った製品咀嚼器としての自我が発する欲求は、糸の切れた［ロ］のように無限定なものとなっている。それは、物の限度を自らの全知覚を通して内側から納得していく自然の制動機を内蔵していない。消費の自我に加えられる制限は、物との相互関係ではなくて金銭という名を持つ「印刷された紙切れ」の保有量の限界だけである。その「記号」の命令だけが欲求に禁止を指令する。［ハ］禁令に代って、流通無碍なる紙切れの記号が、同じく外側から禁止命令を加えるのである。かくて、欲求不満は極めて当然に起こって来る。

そして、(1)不安定な性質を宿命的に持っているから、それだけに却て用心深く自我防衛の(2)キセイを作り出そうとする。自分に対して余計な脅威や驚きを与える可能性を持っているもの、すなわち「他者」は、それが人であれ物であれ事であれ、いきなり自分に遭遇することの出来ないように遠ざけられる。自分をカプセルに容れるのである。繭のような「家庭」が此処に作られ、違和感を除去した「優しい友達」を周囲に取りよろう。「他者」との対面的な相互交渉である経験がこうして周到に

排除される。

しかし、無菌状態の温室から、世界の事物を手前勝手に選別して、自分にピッタリ来るものだけを採用する態度が行き渡っている処では、世界はどうしても変形を蒙らないわけにはいかない。世界はそれ自体として存在する物ではなくて、［ニ］されるためにだけ、そしてそれまでの間一時的に存在している仮の物に過ぎなくなる。リア王の道化のように「世界の影さ」というだけでは済まされない、物件目録にまで貶しめられた世界がそこに横たわっている。私たちを組み込んでいる現代的ナルシズムは、このような世界像を裡に秘めている。

（藤田省三「ナルシズムからの脱却」による）

問一 傍線部（1）、（2）の片仮名に該当する二つの漢字と同じ漢字を使うものとして最も適切なものを、それぞれ①～④の中から一つずつ選び、マークして答えなさい。 1 ～ 4

（1）

① 庭に離れをフシンする
② 鉄道をフセツする
③ 母方のケイフをたどる
④ 両親をフヨウする

フ

① 会議がフンキュウする
② キュウダイ点を満たす
③ タイキュウ性に優れた車
④ 真相をキュウメイする

キュウ

（2）

① 行動キハンを守る
② キリョウを上げる
③ トウキ簿を作成する
④ 恋人のキゲンを損ねる

キ

① 世界市場のセイハを目論む
② ソクセイ栽培の作物
③ キンセイのとれた美しさ
④ 鬼をセイバツする

セイ

問二 波線部（a）について、ここで言われる「自我」に当たるものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークして答えなさい。 5

① 問題の塊としての自我
② 疑いの対象としての自我
③ 生産者としての自我
④ 心理学的自我
⑤ 現存する自我

問三 波線部（b）について、筆者がその固有の要素とは**みなしていないもの**を、次の①～⑤の中から一つ選び、マークして答えなさい。 6

① 「物に即した」識別行為によって現存世界から虚偽を抜き取り、物事の自然の真なる姿を描き出していくこと
② 己れの裡に入り込んで来ている一切の虚偽や偏見を、疑いと思考によって「抜き取ろう」とすること
③ 「もう一つの此の世」の創作といえるような、根本的な世界像の転換をもたらすこと
④ 虚偽に満ちた自我を否定していき、それをゼロにまで還元すること
⑤ 「別の処」に向き始める自然的な関心の的が自我へ、「私」へと絞られていくこと

問四 波線部（c）に該当する作品を、次の①～⑩の中から**二つ選び**、マークして答えなさい。ただし、解答の順序は問わない。 7 ・ 8

① 「伊豆の踊子」　② 「羅生門」　③ 「蒲団」　④ 「蟹工船」　⑤ 「破戒」
⑥ 「山椒魚」　⑦ 「五重塔」　⑧ 「山月記」　⑨ 「金閣寺」　⑩ 「城の崎にて」

問五 空所イ、ロに入る語として最も適切なものを、それぞれ①～⑤の中から一つずつ選び、マークして答えなさい。 9 ・ 10

イ 9
① 向　② 途　③ 俎　④ 頭　⑤ 路

ロ 10
① 鳥　② 網　③ 竿　④ 弓　⑤ 凧

問六 波線部（d）の内容として**適切でないもの**を、次の①～⑤の中から一つ選び、マークして答えなさい。 11

① 大量消費の機構の中に沈没すること
② 現に在る「自我」を肯定し自足すること
③ 世界を物件目録にまで貶めること
④ 自我の満足だけをひたすら追求すること
⑤ 経験を周到に排除すること

問七 波線部（e）の事態が生じるのはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークして答えなさい。 12

① 自分をカプセルに容れ、「他者」を自分に遭遇することの出来ないように遠ざけるため。
② 全ての知覚形式を通して、総合的に物それ自体を知ることができるようになるため。
③ 無菌状態の温室から、世界の事物を手前勝手に選別して採用するようになるため。
④ 欲求の満足だけを追求することになり、そこには絶えず不満と不安がつきまとっているため。
⑤ 物との関係を失っており、それゆえに物の限度を内側から納得していくことができないため。

問八 空所ハ、ニに入る語として最も適切なものを、それぞれ①～⑤の中から一つずつ選び、マークして答えなさい。

13 ・ 14

ハ 13

① 宗教的　② 自然的　③ 道学的　④ 心理的　⑤ 物的

ニ 14

① 想像　② 消費　③ 除去　④ 使用　⑤ 変形

問九 波線部（f）に関して、「持っている」の実質的な主語（ないし主部）は何か。最も適切な語句（主語を表わす助詞は省略）を、次の①～⑤の中から一つ選び、マークして答えなさい。 15

① 製品咀嚼器としての自我
② 消費の自我に加えられる制限
③ 「記号」の命令
④ 流通無碍なる紙切れの記号
⑤ 欲求不満

問十 本文の内容に即した記述として最も適切なものを、次の①～⑧の中から**二つ選び**、マークして答えなさい。ただし、解答の順序は問わない。 16 ・ 17

① 具体的な物と対面しながら生きている自我は、物事をそれとして即物的に識別することによって物事の真なる姿を発見することになる。
② 戦前の日本の「私小説」においては、今日の社会に一般的な自我への関心の集中というあり方とは違って、自我それ自体が目的とされていた。
③ 生活資材の全てを大量生産・大量流通に負うようになるという「世俗化」の貫徹が、自我への収斂という今日の精神的局面をもたらした。
④ 欲求の満足を目指す自己内運動という形をとる自我志向は、それ自体では存在しない仮のものへと変形された世界像を伴っている。
⑤ 繭のような「家庭」を作り、違和感を除去した「優しい友達」で周りを固めるような態度から、「現代的ナルシズム」は引き起こされる。
⑥ 社会的行動の大部分が「公式の務め」という性格を帯びてくると、人々の関心は今日までつねに神や宗教的彼岸などへと向かってきた。
⑦ デカルト的懐疑と等価であったリア王の問いは、現存する自己に痛烈な疑いをさし向ける鋭い自己否定性を持つものであった。
⑧ 今日における自我への収斂という傾向のなかで働いている理性は、充足における損得を計算するような「自然理性」である。

問題二　次の文章を読んで、後の各問に答えなさい。

森崎和江は一九二七年、植民地朝鮮で生まれた。教師として植民地の青年の教育に当たっていた森崎の父親は、家庭の日常会話の中でも長女の森崎に「お前個人、それから朝鮮の青年個人というものに立脚して、個人はみな平等なものである」と話し聞かせたという（「女性の意識について」『ははのくにとの幻想婚――森崎和江評論集』）。「集団に対する個人の優位」を原則とした父親のもとで、森崎は日本を知らない日本人として一七歳まで朝鮮で暮らした。植民地の日本人社会は単身者か核家族で構成されており、「伝統」を体現するような年配者はそこにいない。加えて、肉体労働に従事する日本人もまたいなかった。森崎の生育環境は伝統とも日常生活の土台とも切りはなされた一種の(a)抽象的な実験場に類するものだったが、そこで生まれた本人はその抽象性に気づき得る立場にはいない。父の教えである自由主義的個人主義の人間観は、そのまま植民二世の娘にとっての現実だった。

もう一つのエピソードを加えておこう。森崎は植民地朝鮮の民衆が支配者である日本人の「女の子」に向ける張りつめた視線のことをしばしば書いている。性欲よりも殺意が勝るような彼らのまなざしをその身に受け、それを見つめ返すことで、森崎は在朝鮮の、日本人の、女性の身体を形成した。その個的身体の輪郭は張りつめた緊張感に満ちていたことだろう。森崎は幼少期を通して他人の中に「まぎれこむ」という生活意識はなかったという。「日本には雑踏にまぎれるということばがある。群衆の中の孤独ということばもある。いかにも日本だなあと思う」（「わたしのかお」『ははのくにとの幻想婚』）。だからこそ、日本で暮らすようになってからの彼女は、(b)他者の他者性について突きつめた思想をついに持ち得なかった日本に強く反発することになる。

敗戦を挟んで父の郷里で暮らすようになった森崎がそこで出会った「日本」は、徹底的な嫌悪の対象であるほかなかった。そこでは自分のことなど全く知らないはずの人々が、すべてわかっているという調子で、よく帰らしたのう、と受け入れてくれる。「私がどういう(c)剣呑なことを考えている小娘かというようなことは全然問題にならなくて、父の総領娘だということ

だけでもって完全に受け入れてくれた」のだ。日本の人々は相手の帰属先を確認せずには済まないように「あなたのおくにはどちら」と挨拶のようにたずねてくる。個人の本質を問うことなく、家柄や生まれといった属性だけで受入れられるか排除されるかが決定される共同体の体質に、森崎は強く反発した。その感覚は「個的存在に対する自信のなさ」としか思えない。大人たちはいつもにたにたしており、「それは他人の帰属意識に対する許容の表情」らしかったが、同時に「それからはずれることへの恐怖の表情」でもあった。当時の森崎はその表情の群れに対し「くさった土民ども！」と、やりばのない憤ろしさに堪えていたという（「私を迎えてくれた九州」『ははのくにとの幻想婚』）。

単独の個体たり得ない人々が「土民」にみえるまでに森崎は「近代人」だったのだが、ここで注目したいのは、かくまで際立てられた図式である。この記述からはむしろ森崎が自分の内に育てた個という価値の抽象性を際立たせているように感じられてならない。抽象を現実の場で生きるとはどういうことなのだろう。たとえば次のようなエピソードがある。

日本に引揚げたのち療養所に入っていた森崎と見舞いにきた弟との会話を聞くともなく聞いていた隣の患者がこう言った――きれいなことばで話しをするので感心していました、兄弟の間でそんな言葉をつかうのはどういう人なのだろう――そう語りかけられ、姉と弟は傷にふれられたように(d)沈黙する。それは侵略時代の外地用日本語であり、政策的に作られた人工語であり、生活の澱のないことばだった。「外地では生活語の体系を観念化してしまった標準語だけが、植民者二世のことばとなって、朝鮮人の小市民階層の子らとそのことばを共にしていた」（「民衆のことばの発生」『匪賊の笛』）。

生活実態からあらんかぎり遠ざかった標準語。森崎の内部にあるのはこの非自然の言葉であり、それが彼女の自然だった。ここでは固有のものと外的なもの、自然と人工、あるいは観念と現実といった通例の対立が［　イ　］。「日本」に出会った森崎は、その共同体的心性に耐えがたい憤りを抱いたが、しかしその情動の根拠となる感性はといえば、植民地の人工空間で培養されたそれでしかない。日本は他民族の生活空間を奪い取ったが、そのことによって(e)植民二世の娘もまた復讐されていた。朝鮮の風土という具象から剥離し、日本で暮らすようになった植民二世の日本語は奇怪な異物と化し、彼女の「言葉と肉」の関わりは大きく変質していく。「私にとって、日本のくにの日本語は、第二言語のように、どこまでいっても実感がつ

かめない奇怪な生態めいていた。私は、自分とことばと空や風とを、それまでのように、律動をもって感じることはのぞめなくなったのを知っていた」（「日本語とのつきあい」『詩的言語が萌える頃』）。

（佐藤泉『死政治の精神史』による）

問一 波線部（a）の説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークして答えなさい。 **18**

① 日本が調査のために行なった社会実験だということ
② 科学者によって人工的に設計された都市での生活だということ
③ 日本・朝鮮双方の文化や生活と無関係な社会だということ
④ 外部の物理的環境から隔絶した封鎖空間であるということ
⑤ 日本と朝鮮の伝統を融合させる実験場だということ

問二 波線部（b）の説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークして答えなさい。 **19**

① 日本人は朝鮮人の心を理解できないということ
② 群衆の中で孤独だと感じること
③ 他人にはどこまでいっても気持ちが通じることがないこと
④ 個々人が民族や性や生い立ちにおいて本質的に異質であるということ
⑤ 非対称的な権力関係によって上下関係があるということ

問三 波線部（c）の言葉の意味として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークして答えなさい。 **20**

① 鋭い　② 呑気な　③ 純粋な　④ 頑なな　⑤ 危ない

問四 波線部（d）の理由の説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークして答えなさい。 **21**

① 「感心した」という言葉に皮肉が込められていたから。
② 「きれいなことば」という表現により自分たちの言葉の不自然さを自覚させられたから。
③ 自分たちでは「きれいなことば」かどうかを認識できず反応できなかったから。
④ 「どういう人なのだろう」と問われたことに対して説明に窮したから。
⑤ 侵略という日本の過ちを説明しても理解してもらえる自信がなかったから。

問五 空所イに入る最も適切なものを、次の①～⑥の中から一つ選び、マークして答えなさい。 **22**

① 内的に瓦解している
② 内的に結合している
③ 内的に置換している
④ 外的に衝突している
⑤ 外的に類似している
⑥ 外的に並行している

問六 波線部（e）の説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークして答えなさい。 **23**

① 朝鮮の風土を忘れ去ってしまい表現できなくなった。
② 言葉と物の対応が全くうまくいかなくなってしまった。
③ 日本語を第二言語として学び直すことを迫られた。
④ 実感をともなった言葉で風景や日常を表現できなくなった。
⑤ 朝鮮語を話すときの独特の律動を失ってしまった。

問七 本文の内容に即した記述として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークして答えなさい。 **24**

① 森崎和江は父親から自由主義と個人主義を教え込まれたことにより、朝鮮の植民地支配に対して強く反対する意見を持つようになった。
② 森崎和江は朝鮮で生まれ育ったために、日本社会にある「雑踏にまぎれる」という生き方を帰国後に身につけるのに苦労した。
③ 森崎和江の日本語は人工的で不自然であったが、そのためにかえって標準的できれいな言葉となっており、森崎は密かにそのことを誇りに思っていた。
④ 森崎和江の日本語は、植民地で学んだものであったため、帰国後に日本の空と風を言葉で表現すると、どうしても朝鮮の風土を想起せざるをえなかった。
⑤ 森崎和江が同質性を疑わない日本の共同体に反発を抱いたのは、植民地で身につけた日本語が日本国内の伝統や生活から乖離していたことが一因であった。

問題三 次の各問に答えなさい。

問一 文意が一通りに限定されるものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークして答えなさい。 **25**

① 区役所で高齢者活動支援を担当する渡辺さんに話を聞くことができた。
② 日常の一コマから時代のテーマを切り取る傾向は彼の晩年の作品に目立つ。
③ 復興支援のボランティアは倒れた木を片付けながら震災当日の様子を説明する漁師の話を聞いていた。
④ 昨日のできごとについて尋ねると彼はやおらグラスを置き話し始めた。
⑤ 受付の女性は黙ってロビーで仕事をしている男性の肩をたたいた。

問二 文法的に**適切でない**用例を含む文を、次の①～⑦の中から**二つ選び**、マークして答えなさい。ただし解答の順序は問わない。 **26** ・ **27**

① 最も信頼していた同僚に企画を盗まれ、煮え湯を飲まされた思いだ。
② 引責辞任した社長からの発言を一言でも拾おうと、記者たちは会社の前で手ぐすねを引いて待っていた。
③ 雨が降ったり止んだりしているので、家を出るかどうか迷っているうちに時間が経ってしまった。
④ 最近の子どもたちがなりたい職業といえば、ユーチューバーを知らない人はいないだろう。
⑤ 姉からの北海道土産は、箱がつぶれて蓋が開かなくなっていた。
⑥ 新薬開発には時間とコストがかかるため製薬業界への参入障壁は高いと言われる。
⑦ 犯人が生きていても、私が枕を高くして寝ることは難しいだろう。

問三 （1）～（3）の傍線部（a）、（b）、（c）について、表記または言葉の使い方の正誤の説明として最も適切なものを、それぞれ①～⑧の中から一つずつ選び、マークして答えなさい。 28 ～ 30

（1）小兵力士は(a)土俵際の危ういb態勢から相手のふところに入り込み、一気に(c)横綱を押し倒した。 28

① （a）だけが誤り　② （b）だけが誤り　③ （c）だけが誤り
④ （a）と（b）が誤り　⑤ （a）と（c）が誤り　⑥ （b）と（c）が誤り
⑦ （a）と（b）と（c）が誤り　⑧ 誤りはない

（2）現状に応じて学習と(a)教授の方法論を(b)更新していくことが教育の(c)基幹である。 29

① （a）だけが誤り　② （b）だけが誤り　③ （c）だけが誤り
④ （a）と（b）が誤り　⑤ （a）と（c）が誤り　⑥ （b）と（c）が誤り
⑦ （a）と（b）と（c）が誤り　⑧ 誤りはない

（3）新しい生活(a)用式における消費行動の変化は新たなb商起を(c)創造した。 30

① （a）だけが誤り　② （b）だけが誤り　③ （c）だけが誤り
④ （a）と（b）が誤り　⑤ （a）と（c）が誤り　⑥ （b）と（c）が誤り
⑦ （a）と（b）と（c）が誤り　⑧ 誤りはない

問四 慣用表現を用いた（1）～（5）の文の空所に当てはまる語として最も適切なものを、それぞれ①～⑤の中から一つずつ選び、マークして答えなさい。 31 ～ 35

（1）この事件には、詐欺グループの主犯格であった［　］つきの人物の名前が浮上している。 31

① 泥　② 色　③ 足　④ 折紙　⑤ 曰く

（2）営業先をまわったが、どこも話を聞いてもらうことすらできず［　］にされたような状況だった。 32

① 鬼　② 念　③ 物　④ 袖　⑤ 掌

（3）保守的な経営を続けてきたせいで倒産の危機に直面したのだと［　］を噛む思いでいる。 33

① 顎　② 舌　③ 臍　④ 苦虫　⑤ 砂

（4）審査員からの温かいアドバイスが私の［　］に触れ、作品制作に対する考え方を改めた。 34

① 目　② 癇　③ 核心　④ 逆鱗　⑤ 琴線

（5）誘致の賛成意見が大半を占め、誘致反対派の［　］は悪かったもののその後盛り返した。 35

① 御旗　② 旗色　③ 旗印　④ 旗竿　⑤ 旗頭